

第3回江別市行政審議会 第2部会 会議録（要点筆記）

日 時：平成25年4月10日（水） 18:00～20:40

場 所：江別市民会館 31号室

出席委員：河西委員、安孫子委員、梶野委員、徳永委員、町村委員、草野委員（計6名）

事務局：鈴木企画政策部長、米倉企画政策部次長、千葉課長（政策調整課）、西田参事（総合計画担当）、村田主査（総合計画担当）、長谷川主任（総合計画担当）

■開会（河西部会長）

本日の議事に関しては、まずえべつ未来戦略の柱立てを中心に議論を進めていきたいと思ひます。また、時間があれば、えべつ未来づくりビジョンの内容についても議論したいと思ひます。

前回の全体会議では、総合計画の骨子（たたき台）全体に関して議論しました。新しい総合計画は、えべつ未来づくりビジョンとえべつ未来戦略の2つで構成されます。そのえべつ未来づくりビジョンについて、この第2部会に関するご意見としては、「3 めざすまちの姿」の記載に関して、「江別の産業が活性化して、市民が食いぶちを得て生きていくための意気込みが感じられるような記述を検討してはどうか。」というご意見があり、記載してある内容では弱いのではないかとご意見がありました。

それから「（4）今後の土地利用の方向性」のところ、周辺部に新しい産業を誘致する戦略的な事業を行うという部分と、もう一つのコンパクトシティに関する記載の部分を分けて記載してはどうかというご意見がありました。

また、14ページからの「（2）まちづくり政策」の産業のところに「商工業の振興」とありますが、サービス業・ソフト産業を含めた表現を検討してはどうかというご意見がありました。

そして今日は、17ページからの「Ⅲ えべつ未来戦略」の中の「2 えべつの将来を創る産業活性化」について中心的に議論させていただきます。これに関しても前回の全体会議でご意見が出ていました。「環境に優しい再生可能エネルギーを活用した産業の振興」の他に、家庭の省エネルギー化や産業の省エネルギー化の促進を検討してはどうか。」というご意見と、「地域資源の活用による観光の活性化」の柱立てがどれも同じような内容なので、柱立てを整理してはどうか。」というご意見がありました。これらの全体会議でのご意見も踏まえつつ、今日の部会の中でもう少し踏み込んだ議論をしていきたいと思ひます。

■議事

（1）えべつ未来戦略の柱立てについて

<戦略「えべつの将来を創る産業活性化」全体の印象について>

○ 河西部会長

柱立てが全部で5つありますので、この柱立てについてそれぞれご意見をうかがって

いきたいと思います。とは言っても、なかなかすぐにご意見は出てこないと思いますので、草野委員から順番に今回の「えべつの将来を創る産業活性化」という戦略をご覧になった感想などについてご意見をうかがっていきたいと思います。

○ 草野委員

あまりにも総花的な感じがしたので、江別の産業の特色をもう少し具体的に表現した方が良いのではないかと思います。普段みなさんが考えているとおりのことが書かれています。具体的にそれらを1つずつどう捉えていくのかが問題になってくると思います。「1次産業を基盤にした付加価値の高い産業の集積」とありますが、どういうことなのか考えてもなかなかピンときません。酪農があり、小麦の生産があり、食品加工研究センターがありますが、そういったものを利用して何をしているのかというのが、一般の人には伝わっていないと思います。食品加工研究センターがあることを知っていて意識している人は、食品加工研究センターでどういうものを作っているのかわかると思いますが、一般の人には伝わっていないと思いますので、もう少しそういったことも教えていただければと思います。

○ 河西部会長

戦略という割には総花的で、重点化している項目がわかりにくいということと、非常に抽象的な文言になっているので、具体性があまり感じられないというご意見かと思えます。今日は事務局でみなさんのご意見を、随時パソコンで打ち込んで整理をしていますので、所々でみなさんのご意見を振り返りながら議論を進めていきたいと思います。

○ 町村委員

「○ 地域資源の活用による観光の活性化」について、前回の審議会で発言させていただきましたが、要するにどういうことなのかがわかりません。観光資源の発掘をする段階で今のところ止まっています。いつまでも発掘している場合ではないと思いますので、その先に見える具体的な成果はこれだというものを一つ打ち出していけると良いのではないのでしょうか。一番下の「・観光資源のネットワーク化」は、資源のネットワーク化、人の動きのネットワーク化、情報のネットワーク化など色々な捉え方があると思いますので良いと思いますが、その上の3つについては、どのようにでも捉えられるような総花的な印象です。具体的なことを打ち出すのはこの審議会の目的ではないのかもしれませんが、もう少し具体性が見える形のまとめ方にしたほうが良いのではないのでしょうか。何をテーマにしていくか、具体的な産品などを一つ打ち出してしまうのは問題がある気もしますが、最近、市長がよくウォーキングという話をおっしゃっています。ウォーキングと記載してしまうのは具体的過ぎる気もしますが、江別は体育館などの施設が揃っていますので、健康という視点を観光の要素の一つとして打ち出すというのはあり得るのではないのでしょうか。食と関連する部分でもありますし。

それと、「○ 中小企業の活性化」の部分について、江別は大企業もありますが数えるほどしかなく、ほとんどは中小企業と個人事業で成り立っている街ですので、明確に雇用の担い手という位置付けになっています。国としても中小企業憲章というものを定め

ていますので、それにもとづいて行政サイドとしても中小企業振興基本条例のようなものを考えていくという方向性を打ち出していく時期ではないかと思えます。

○ 河西部会長

今回のえべつ未来戦略に打ち出されているものは、昨年度行われたえべつ未来市民会議の戦略テーマの提言が基盤になっています。そして、そこで議論されたものを抽象化して文言にしたのが、今回のえべつ未来戦略になっています。たとえば「・地域資源の観光への有効活用」であれば、具体的にはセラミックアートセンター、埋蔵文化財センター、れんが建築物、四季のみち、道立野幌総合運動公園、野幌森林公園、石狩川などを有効活用するというご意見がありました。そして有効活用についても、自然ガイド、歴史ガイド、れんが建築物ガイドなどを育成しようというご意見が出ていました。また、「・観光資源のネットワーク化」に関して、先ほど町村委員から発掘に止まっていて、その次は何を目指すのかというご意見がありました。それについて、具体的には江別の観光に関するツアー商品を市民みんなで考案して、試験的に実施してみて、上手くいきそうだったらエージェントに売り込んでいってはどうかというご意見がありました。先ほど草野委員がおっしゃっていた「・1次産業を基盤にした付加価値の高い産業の集積」に関しては、食品加工業やバイオ関連企業の誘致をして、新たな工業団地を建設してはどうかというご意見が出ていました。また、町村委員から出された中小企業振興基本条例に関しても、えべつ未来市民会議の地域産業部会の中で、今ある江別の中小企業振興条例のように個別具体的な内容ではなくて、その上位に位置づけられるような基本理念を示した条例を策定して欲しいというご意見が出ていました。

今後、戦略の柱立てを決めた後に、素案としてその具体的な中身を考えていく段階でまた色々みなさんからご意見をいただこうと思えます。

○ 徳永委員

どういう切り口で発言したら良いのか迷っています。えべつ未来戦略の骨子をつくるために意見を求められていますが、先ほど河西部会長からお話があったように、今回我々に提示された骨子（たたき台）は、えべつ未来市民会議での具体的な意見があっでています。骨子（たたき台）として抽象的な柱立てにしたものを具体化すると、また元に戻ってしまうのではないのでしょうか。骨子（たたき台）として示されている部分というのは、我々委員だけでなくすべての市民の方々が納得することばかり記載されていると思えます。今後、行政がえべつ未来戦略の方向性に基づいて具現化していくのだらうと思えますが、その時に一番必要なのは、戦略の一つにもなっている協働のまちづくりではないかと思えます。これから行政が具現化する事業にしても、市民が直接関わることで形になります。その形が、一つのテーマに基づいて市民の発想も入りながら、行政も一緒になって取り組むことで、それが江別の一つの顔になります。そういう役割を担わなければ、せっかく様々な議論を経て計画をつくり上げても、たくさんの人が関わって、たくさんの市民が色々な議論をした結果、このような計画ができあがったのだということが見えてこない、なかなか次のステップに繋がっていかないと思えます。行政

がこの計画を最終的に具現化していくときに、どれだけ市民を巻き込んだ形で事業を推進していくかという視点が必要だと思います。なぜこのような話をするかというと、中津湖の事例があります。もともと石狩川の流れが変わってできた三日月湖のようなもので、道内の釣り愛好家の中では隠れた釣りスポットとして知られていましたが、管理する人がいなかったため、ゴミ捨て場のように荒れた場所になっていました。それが、地域の人たちが一体になってその周辺の清掃に取り組んだことで綺麗になりました。綺麗になるとゴミを捨てる人も減りました。このように、自分たちの力で環境を変えられるのだ、当たり前だと思っていたことも自分たちが発想を変えることで変わるのだ、という意識を市民が持つことが必要だと思います。もともと無名だった水たまりが、今は国土地理院発行の地図に中津湖と命名されて掲載されるようになりました。それは地域の人たちにとって次に何をやるかということの励みとなります。ですから、大きなことでなくても、何か物事を進めるときに市民が参加して、それが形になって、それが市民の中に受け入れられるというプロセスを体験させることが、将来のまちづくりにとって大きなポイントになってくると思います。

○ 河西部会長

直接的なお答えになるかわかりませんが、えべつ未来戦略の最初にあるのが「ともにつくる協働のまちづくり」となっています。どの戦略でも協働という手法は欠かせないという意味合いがあってトップに協働の戦略があります。「えべつの将来を創る産業活性化」に関しても、たとえば農業分野の地産地消の推進で、市民がもっと農業に親しめるような市民農園などをつくって、農業者と消費者の距離をもっと近くしようという意見がありました。観光についても、市民が愛している江別の良いところがたくさんあるので、それを市民が集まってみんなで観光資源をネットワーク化して、市内外に発信したいという意見がえべつ未来市民会議の中でありました。観光に関しても、観光協会と行政だけでやるのではなく、観光戦略会議みたいなものをつくって、そこに市民が入って色々な意見を出し、意見を出すだけではなくて実際に一緒に汗をかいて一緒に観光を盛り上げていこうという意見が出ていました。したがって、「えべつの将来を創る産業活性化」の戦略でも協働は不可欠な手法だと考えています。そういう視点でも色々なご意見が出てくれば、また違った柱立てが考えられるかもしれませんし、柱立ての中身も変わってくると思います。

○ 梶野委員

最近、農家の方が頑張っていて色々なものが商品として出されていますが、その商品を加工して食料として出す方法を今後考えていくと、それがブランド化にも繋がります。たとえば、市内に4大学5高校あるのですから、その力を借りて商品開発するというのは一つの方法としてあるのではないのでしょうか。それと今、野幌商店街でも道路拡幅工事の絡みで色々勉強しているのですが、一番問題となるのはやはり環境とエネルギーのことです。エネルギーでは最近、ソーラーが注目されていますが、ソーラーよりももっと安くできるものとしてビルの排熱利用というのが出てきており、それについて勉強

しているところです。観光の部分については、8月からサイクルシェアリングを実施しますので、これを利用しながら、観光マップをつくってコースを決めて案内するというのも一つの手法ではないかと考えています。

○ 河西部会長

商店街というところに限定しても環境との関わりというのは非常に大きいというのがまず第1点。それから先ほど徳永委員から出ていた協働に関しても、大学や大学生が1次製品の加工による商品の開発や商店街活性化に関わってくるという形での、協働による産業活性化も必要ではないかというご意見だと思えます。

○ 安孫子委員

これからは少子高齢化・人口減少は避けられない話です。その中で、どうやって働けることができるか、どういう仕事ができるかというのが一番のポイントだと思えます。1次製品を利用してもっと付加価値を上げていくという産業もあります。それだけでは間に合わないのもっと広域的に商売をしていく手法もポイントになってくると思えます。地産地消は非常に大事なことで、そこで一つの完結したものができますが、それだけでは江別の経済は持たないので、もっと稼ぐ方法を考えなければならないと思えます。そういう面で考えると江別だけでできる話ではなくて、江別周辺も含めて北海道全体になるかもしれませんが、その中でどのような経済的・産業的な戦略を持って取り組んでいくかを考えた上で江別の役割を考えないと、市民の稼ぎの面では大きく減少してしまうのではないかと思えます。産業が活性化してしっかり稼いでいる街は色々な活動ができますが、それが無いとどこかに頼らなければできないということになってしまうので、それは避けなければなりません。江別で最近言われるフード・コンプレックスも一つの方法だと思えますが、あまり地域だけで閉じこもって物事を考えずに、もう少し近場の広域で力を合わせる産業のつくり方をして発展させていくことが大事だと思えます。今、江別の話を一生懸命していますが、札幌圏との関連性を持ちながら江別の役割を考えて進めていかなければ、周辺の行政区域の中での競争になってしまい、良い結果にはならないと思えます。

最後の頼みの綱は産業誘致ですが、立地してもらおうための条件を自らつくっていかなければ、立地した企業を支える地域のポテンシャルがなければ、企業は進出してきません。単純に企業を呼べば良いという簡単な話ではないと思えますので、経済に関する要素はどういったものがあるかを考えて組み合わせながら取り入れていくべきです。たとえば、教育というのは大きな要素だと思えます。教育環境が整っていて人材が揃うということは大きな要素になりますし、インフラがしっかりしているということも要素として出てきますので、そういった視点もしっかり持ってやっていくべきだと思えます。

○ 河西部会長

どちらかというと江別に限定して、江別の中で産業の付加価値を向上していくために深掘していくという考え方が中心になっていますが、そうではなくて、江別の周辺も含めてもう少し広域的に考えて、たとえば札幌圏としての競争力を高めていく、その中

で江別の役割を考えていく、というのがご意見の第1点目だと思います。第2点は産業を誘致するときのプラットフォームとしての江別の競争力をどう作り上げていくかというのが問題ではないかというご意見でした。たとえば、若くて優秀な人材が多い地域ほど、よりハイテクな産業・企業の誘致が可能ですし、女性等の労働力が多いところではサービス産業などがうまくいくかもしれません。その他にも地域の競争力を決める要因として、周辺産業があります。たとえば、食品加工業を誘致するときには、原材料を供給する農業が盛んであるとか、そこでつくられたものを全国や海外へ持っていくための物流がしっかりしていることであるとか、近くにマーケットがある方が望ましいなどと言われています。そのような江別の競争力全体をもう少し考えたらどうか、というのが第2点目のご意見かと思います。

これから一つずつ議論して中身を詰めて素案にしていきますが、今日はその前段として、事務局から出された骨子（たたき台）の「えべつの将来を創る産業活性化」の戦略の5つの柱立てについて、これで良いかどうかというところにポイントを絞って議論していきたいと思います。

＜戦略「えべつの将来を創る産業活性化」の柱立てについて＞

○ 河西部会長

えべつ未来市民会議で議論した内容をある程度グルーピングして、戦略としてまとめたのがこの5つの柱立てです。先ほど戦略全体の印象を各委員にうかがった中でも、この柱立てに関して、総花的なのでもう少し絞り込んだ方が良いというご意見や、江別市中心の視点だけでなく、もう少し広域的に考える視点もあった方が良いのではないかとのご意見もありました。それと、地域の競争力を高めるためのプラットフォームとしての地域社会をどう作り上げていくかということは、ここではたとえば「・企業の人材育成の支援」とか「・企業と人材のマッチング支援」という程度しか記載されていませんが、それ以外にもあるかもしれません。そうすると、1本柱立てとして必要ではないかという考え方も出てくるかと思います。まずはこの柱立てを決めて、それから中身を次回以降の部会で議論していこうと思います。また、徳永委員から出された協働については、他の戦略として「ともにつくる協働のまちづくり」がある一方で、「えべつの将来を創る産業活性化」の中には協働という言葉が一言も無いという状態です。骨子（たたき台）とは違ったまとめ方もあるかと思いますので、そういった柱立てに関するご意見を伺いたいと思います。

○ 徳永委員

「えべつの将来を創る産業活性化」の柱立ては5つに分かれており、このように分けて見てしまうと、たとえば「○ 農業を核とした産業の育成」とありますが、農業は農業だけでやっていけるのだろうかと感じます。江別の街の中で、農業というのは農業だけで生きていけるものではなく、市民・商店街など、色々なところとお互いに連携を取りながら、農業を生業としながら地域の住民として一つの生活圏をつくり上げていくとい

うのが、これからの高齢化社会における社会づくりの形ではないでしょうか。農協でも様々なテーマを掲げて取り組んでいます。その一つに生涯現役農業というテーマがあります。一定の年齢になって経営移譲した後でも、何らかの形で一生農業に関わっていてほしいという考えで、直売所などを設けたりしています。そこでは農業者ということに拘ることなく、市民農園を手掛けている方でも余った作物を持ち込めるように門戸を開いています。農業は農業、商業は商業という括りではないテーマの持ち方はできないでしょうか。そもそも江別の街は屯田兵によって開拓され、農業という手段が出来て、そこに人がいれば必然的に農業者だけでは集落として成立しませんので、色々な商店などが出来てきました。農家は秋にならなければ作物ができませんから、春から秋まで商店の方にお世話になるという社会構造が成り立っていたと思いますが、それがいつの間にかだんだん商店とは疎遠になってきています。あるいは本来なら商店で買えば良いものを札幌まで買いに出たり、大型店に買いに行ったりして、Aコープ自体も組合員が利用しなくなり閉店するというような構造になってしまっています。柱は5つでも構わないと思いますが、すべてがリンクしていくようなテーマの持ち方が必要ではないかと思えます。

江別の場合は観光がすべてにリンクしてくると思えます。農業のブランド化をするにしても、全国に発信するとなると、やはり観光客の皆様に江別の農産物や加工品を広めてもらうことができます。わざわざセールスして歩かなくても、観光客が来てくれます。あるいは、やきもの市に来たお客様が、残りの365日をどうやきもの市とリンクしていけるのかと考えたときに、江別の持っている素材を365日継続して発信できる仕組みづくりができるのは観光業だけではないでしょうか。フード・コンプレックスにしても地産地消で直接物を売るにしても、正直言って江別の農業産出額からいうと、江別の12万人の市民のみなさんが全部江別産のものを買うようにしてくれたとしても、江別の農家は生活していけませんので、結局どこかへ持って行って売らなければなりません。そうしたときに、やはり観光を通じて農業・商業の活性化をはかる必要があります。観光客は千歳から札幌へ出て、そこから全道各地へ散らばりますが、結局江別は通り道でしかないため、1日でも半日でも江別に滞在してもらえようなまちづくりができないでしょうか。

○ 河西部会長

14ページの「(2)まちづくり政策」の「産業」を見ていただくと、行政の組織もそうですが、産業ごとに縦割りになっています。えべつ未来戦略では、縦割りでなく、観光なら観光に関わる農業なども含めて統合した形で戦略の柱としていこうという考え方で、このようなまとめ方になっています。ただその一方で、ここで書かれている戦略もまちづくり政策もすべて産業からの目線となっています。徳永委員がおっしゃったことは、生活者とか観光者の目線で見るときに、江別の産業はこうあってほしいという、いわゆる顧客から見たマーケティングの発想で産業振興・産業活性化を考えられないかというご提案なのかなと感じました。

○ 徳永委員

江別市民が、自分が関わっていること以外のことについてあまりにも知らな過ぎると思います。農業にしてもどういうものが江別の産品としてあるのか分かっていません。農業の関係よりも、ハルユタカの粉やそれで作られたパンなど、農産物の原料ではなく加工品の情報が、メディアを通じて発信されて市民に知られています。逆に言えば、農業者がメディアなどに踏み込んで行って行動を起こしていないせいだということになりますが。そういう情報発信を、行政任せではなく、自ら動いて取り組んでいくことが必要だという意識をみんなが持つことが重要ではないかと思います。

○ 河西部会長

情報発信に関しては、色々なところで議論された結果、えべつ未来戦略では「えべつの魅力発信シティプロモート」という戦略にまとめられました。当然、その中には産業に関わるような情報発信のことも含まれています。

○ 徳永委員

それは十分承知しています。そういったことがすべて網羅されていますので、新たに意見を求められても、どのような意見を述べたら良いか整理が難しいです。行政審議会でも議論したことが最終的にどういう形になって、どういう表現になって、将来の江別のまちづくりに反映されていくのでしょうか。最終的には冊子が出来上がって、我々が議論したことが活字になって、それが審議会でもまとめられたものという形になるのでしょうか。

○ 河西部会長

総合計画の案に対する答申ということで、報告書のような形で市長に報告されます。ただ、えべつ未来市民会議の中では、ただ単に報告書をつくることは我々の求めるところではなく、それに基づいて行政や色々な人たちと協働しながら、一緒になって実現していこうという意見が強くありました。したがって、ここで書かれていることが、一つの基本的な設計図となって、今後誰がどういうことに取り組むかということをそれぞれで考えて、できれば市民会議のような場を設定してもらって、一緒に観光なら観光のことについて意見交換し、実行も一緒に行なって、江別の観光を推進したいというご意見もありました。

最終的にどのような形になるかということについて、このような理解でよろしいでしょうか。事務局から補足説明をお願いします。

○ 事務局

最終的には総合計画は冊子になります。現時点では骨子（たたき台）をみなさんにご審議いただいておりますが、そのあとは素案ということで中身を肉付けしたものをまたご提示させていただき、審議していただきます。構成としては、今までの総合計画は政策があつて施策があつて基本事業があるというピラミッド型の構造でしたが、新しい総合計画では、まずは10年間を目途にしたまちの目指すべき方向性を記載した部分と、もう一つ、それだけでは具体性が見えないことから、えべつ未来戦略という部分で5年

間を目途に具体的な方向性を示しながら行政として取り組むことを記載するという、2本立てで策定中です。ですので、最終的には行政が進むべき方向を示す総合計画書にみなさまのご意見が反映されていくとご理解いただければと思います。

○ 河西部会長

具体的な例でご説明しますと、たとえばべつ未来戦略で江別の観光を活性化させましょうとありますが、観光が活性化された後に江別のまちがどういうまちになっているかというビジョンと、その実現に向かうための方向性や戦略が総合計画に書かれていて、さらに、そのプロセスとしてビジョンを実現するために最初の5年間でこういうことをやっていきましょうというところまで踏み込んで書き込めたら良いのではないかという話が事務局との意見交換の中では出てきています。

○ 安孫子委員

協働という言葉が色々なところで出て来ていますが、協働という意味をどう理解すれば良いのか分かりません。みんなでやるというのは分かりませんが、誰がやるのかが見えません。それぞれが責任を負っているように見えますが、では誰が動き出すのかという話になります。協働という言葉は枕詞としては良いが、実際に進めるときに協働を前面に出し過ぎると、責任の所在というか主体が見えなくなってしまうことが懸念されます。

もう一つ、今ここで検討しているのは、建物でいえば設計図です。実際に建て方が決まれば、施工図が必要になり、どこにどの作業を発注するかという話になります。そうすると、そこまで考えていかないと、目標として掲げているところに向かって実際に動き出そうとした時に、何が想定されるかということが見えてこないのではないのでしょうか。次のことも考えて、逆に考えてフィードバックしたらこういう表現になるということを考えていかないと、実際に誰が主体になってどのようなことをするのか聞かれたときに説明できないのではないのでしょうか。1次産業にはこういうことをしっかりやってほしいとか、加工部門ではこのようなことをやってほしい、ということがうまく繋がっていくようにしなければなりません。そうでなければ、総合計画が単なる計画に終わってしまって、結局、市民は何の話をしているのか分からなくなってしまうのではないのでしょうか。計画を具現化するために、アクションプランとして即座にどんどんやっていかないと結果が見えてこないことになるとと思います。総合計画としては総花的になるのは仕方ないですが、そういう繋がりができるような仕掛けにしておくべきだと思います。行政がやるのか、市民がやるのか、産業が受け持つのかということが繋がっていき、全体として市民の生活が向上して良いまちになるというように繋がるような計画になると、自分たちの計画だという実感に繋がるのではないのでしょうか。

○ 町村委員

10年先までの計画なので、人材や担い手という言葉が適切かは分かりませんが、起業家精神を持って戦略的に物事を考えられる人材が各分野に出てきて、またそういう組織が各分野に出てきて、あるいはそういうものをネットワーク化するようなアイデアを持った人が江別からどれぐらい出てくるかというのが非常に大きいと思います。協働の

戦略のところに入づくりのことがたくさん出ていますが、人づくりなのか組織づくりなのか、そこに至るプロセスづくりなのか、その辺りのことを一つ産業の戦略の中でも、産業別ではなく1次産業から3次産業までまたがって、あるいはそれぞれをネットワーク化する部分において、表現するような柱が必要ではないかと思えます。

○ 河西部会長

産業を担っていく人材を輩出していくための仕組みづくりであるとか、組織づくりといったことも柱として必要ではないかというご意見かと思えます。人材の話に関してはそれぞれの分野で出てきていますので、産業の戦略でも、たとえば若い人たちが江別に定着して自分で起業する、もしくは地元の中小企業に入って企業の成長の一翼を担うというような柱の一つ考えてはどうかというご意見かと思えます。

○ 安孫子委員

事務局に質問ですが、協働の戦略のところ「協働の組織の設立」とか「協働のシステムによるまちづくり」とあるのは、どういうものをイメージしているのでしょうか。

○ 河西部会長

様々な団体が集まって、新しいネットワークをつくって、そこで一緒になって考えて役割分担をして新しいまちづくりをやっていこうという考えだと聞いていますが、事務局から説明をお願いします。

○ 事務局

えべつ未来市民会議の中で提案された「若者（学生）から高齢者までのマンパワーを活かす持続性のあるシステムづくり」というご意見が前提になっています。ポイントとしましては、市民及び市民団体、企業、4大学、江別市などの連携・協働によるコミュニティ活性化の中核となる新しい組織ということで、江別版のCOC（Center of Community）というものを目指した形でのシステムづくりを進めていきたいという提言となっています。

○ 安孫子委員

結局、シンポジウムなのか実行委員会なのかよく分かりませんが、単に集まって話しているだけで協働だということであれば、あまり意味がないのではないのでしょうか。誰が協働するということは、問題によって変わります。全部がいつも集まるというものではないと思えます。多様な主体といったときに、いったい誰が主体の協働であるのかが見える仕組みを考えているということであれば良いのですが、抽象的な話でこの部分だけを聞いてもそうですか終わってしまいます。具体的な例示がないと、それを立ち上げようということにはならないと思えます。

○ 河西部会長

えべつ未来市民会議の地域産業部会の中で出ていた話では、江別経済ネットワークには多様な方が参加されていますが、もっとビジネスにつながるような研究会のような新しいネットワークをつくれないう意見がありました。それだと新しい協働のシステムということになるのではないかと思えます。協働というと、誰が責任を持つのかと

ということが見えにくくなっていきますが、そういう役割分担を含めたものが、14ページから16ページまでのまちづくり政策のところに記載されている主な個別計画等の中で、より具体的な議論がされて、役割分担やプロセスも含めて決められていくのではないかと思います。そして、その個別計画等のもとになる総合計画を今つくっているところになりますので、個別具体的なことはそれぞれの個別計画の中でつくっていくことになります。

○ 安孫子委員

人口12万人の都市なので色々なことが盛り沢山となるのは仕方がないと思いますが、人口3,000人ぐらいの福島県飯館村の村づくりについての村長の話に、住民がどのように生き生きと暮らしていけるかということがありました。そのような、住んでいる人が地域に愛着を持って暮らしていくということが総合計画の根幹にあるべきではないでしょうか。12万人全員がそう思わなくても、身近な普段の生活の中で行政のつくったものと自分たちの生活が関係あるのだと感じられるようになると良いと思います。そうしないと、大きな計画であることは分かりますが、ピンとこないという話になってしまいます。福島の方で「までい」というのがあります。「までいライフ」ということを皆で盛り立てて生活に浸透させようという運動をしており、その内容が、住んでいる人の進む道を示しています。江別のような大きなまちでそういうことを言えるかどうかは別として、少なくともそういう雰囲気があると、江別のまちの特徴が感じられるのではないのでしょうか。

○ 河西部会長

おそらく、11ページの「3 めざすまちの姿」にある「まちづくりの基本理念」が江別でのまちづくりの根幹にあたる部分なのだと思います。

○ 草野委員

すべて連携はしていると思いますが、横一線で物事を考えるよりも一つずつ考えて、それを後で横に繋げる方が、話としては進むのではないかと思います。えべつ未来市民会議ではみんな言いたいことを言いましたので、事務局はまとめるのに苦労したかと思いますが、普段、特定の産業の中に入っている人では思いつかないような意見が市民委員の中から出てきていたのも事実だと思いますので、市民アンケートなり、えべつ未来市民会議の提言なりを読んでいただくと、参考になるものもあると思います。もう少し中身が具体的にないと、柱立てについて議論はできないと思います。

○ 梶野委員

分けるならこの5つぐらいしかないと思いますが、逆に言うと徳永委員がおっしゃっていた、何かと何か繋がるというものがこの中に凝縮されているのかなと思います。たとえば観光客を呼ぶのにおいしいケーキがあれば来てもらえるように、そういう繋がりの部分にももう少し肉付けをしたら良いのではないかと思います。

○ 河西部会長

個別に書かれているけれど、これらを全部トータルでやっていかないと産業の活性化

は実現していかないと思います。一方で、草野委員がおっしゃるように個別に考えていかないとなかなか肉付けしていけないという部分もあり、難しいところです。

徳永委員に伺いたいのですが、たとえばどのような表現であれば5つの柱をうまくリンクさせるような表現になるでしょうか。

○ 徳永委員

それぞれ個別に表記されていますが、これに向かって具体的に行動を起こした時に、自らが動くだけではなくて、他の協力がなくともより効果的な施策や具体的な行動が起せないのではないかと思います。たとえば、農業だけ頑張ったところで、ここに書かれている「・1次製品の価値を高める江別ブランドの創出」は無理です。ハルユタカがあったとしても、江別製粉があって菊水があってはじめて一つのものができたわけです。江別高校生の江別ちゃんぽんも、江別で生産された1次産品を2次加工・3次加工までして一つの形になりました。より効果的なものにするために、もう一段高めていくために、この中でもっと具体的な表現ができないでしょうか。観光とリンクさせるとか、江別という枠組みの中だけでなく、札幌という大消費地を一つのマーケットとして考えていくということが盛り込まれると、より具体的に行動する上で良いのではないかと思います。「・商店街の魅力づくりへの支援」も、たぶん今の商店街だけでは無理だと思います。色々な産業が一緒になって、江別の商店街をつくり上げようという気持ちがあれば、資本力のあるものが来てしまったときに経済的に成り立たなくなって撤退ということになってしまいます。地域に根差した産業が寄り集まって、みんなでつくり上げる商店街というものがいいと思います。これから江別の産業を永続的なものとしていくためには、そういう産業構造にしていく必要があると思います。

○ 河西部会長

そうすると、たとえば柱として江別の産業連携による産業活性化というような柱立てがあると良いのではないのでしょうか。それと先ほど町村委員がおっしゃった産業の担い手・人材の育成というものも柱として必要ではないのでしょうか。

○ 徳永委員

協働の戦略にある「・協働のシステムによるまちづくり」や「・協働のシステムによる人づくり」にリンクしてくるのではないかと思います。

○ 河西部会長

4大学と5高校、それから2短大があって、卒業した若い人たちが江別の地元の中小企業に入って担い手になる、あるいは起業して産業の担い手になる。そしてその人たちが成長していけば、そこで稼いだお金が地域に落ちて江別の経済が発展していくというストーリーになりますね。

○ 安孫子委員

柱立ての分け方はそんなに問題なくできると思いますが、江別の1次産品だけを加工して云々するだけで食べていけるのかということ、当然そんな話ではありませんので、そうすると、なかなかここでは表現しづらいですが、産業の中でどういうマーケティング

をするかということで、それぞれの分野がそういうマーケティングの視点のもとに行動するということです。これから観光の産業化なのか、産業の観光化なのか、あるいはバイヤーを呼んでくる仕組みといったことを、どこがやるのかという話は別にして、そういう仕掛けが江別にはあるぞという話になっていくと面白いと思います。それぞれがその役割を持っているということはありますが、それを束ねて江別の力を発信していくというやり方・視点を持っていたら良いのではないかと思います。たとえば経済部がその中心を担って、市内の色々な可能性を市外に出す中心基地になるというように、役割分担のことがどこかに記載されると面白いのではないかと思います。そうしないと、「○ 中小企業の活性化」など何となく大事だということは分かるが、誰が何をやるのか良く分かりません。江別でブランドを持ってマーケティングをしていくという機能をどこかに位置付けた方が良いのではないかと思います。

○ 河西部会長

そうすると、一つの柱として江別の産業の連携と、その中で連携した事業者を束ねてきちんと売り込んでいくマーケティングの実働部隊が必要ということですね。

○ 安孫子委員

そういうことを計画に書き込めば、行政の力をそこに入れていこうという話になるし、それぞれの企業もそういう視点で活動しようということに繋がっていくのではないかと思います。

○ 町村委員

先ほど観光戦略会議という話が出まして、そういう手もあるなと思いました。今までのいわゆる審議会などと違うやり方でメンバーを集めて、それこそえべつ未来市民会議のような発想で自由に議論すると、意外とそこに新しい芽が出てくるのではないかと思います。他の組織もそうかもしれませんが、自分が観光協会に携わっているのは、事務局を市役所が担ってくれているのはとても楽なのですが、誰か本当に汗をかく人が必要ではないでしょうか。それこそ担い手の話になりますが、市役所の職員も他に作業を抱えている中で一部観光協会の事務局機能を担っている状態です。最近、色々観光に関する素晴らしいアイデアが出てきています。札幌広域圏の関係で、江別で一つの観光ツアーを組んでみようということで、自由参加の形で募って出てきた有志の方々に、色々なパターンを色々な条件に応じて設定するという面白い提案のさせ方をして、ツアー化できるものがあれば、その旅行社が中心になって実際にツアーにしてみようというものがありました。そこが市長のおっしゃる「ヘルシーウォーキング」にも絡んでくる流れになっています。そういう色々なアイデアというのは意外と出てくるものだと思います。推進部隊について、観光協会を法人化して独立運営させているところもある中で、江別の観光協会はそういう体制にはなっていないので、みんな本業を抱えている中で極一部をそこで作業している形ですから、新しい事業を産み出していくのはなかなか難しい体制です。他の江別の色々な分野に関わる組織でも少なからず同様の傾向があるのではないかと思いますので、そういう部分を解消していかないと、進むものも進ん

で行かないのではないのでしょうか。

○ 河西部会長

実際に観光協会や財団法人や社団法人のところを見ていると、指定管理で道の駅を運営して、それで収入を上げて事務局機能を持って様々な観光施策を実行していくという企業としての収益モデルができています。それが無い中でやるのは大変厳しいと思います。総合計画では、そこまで書き込めないかもしれませんが、従来には無い新しいやり方、行政にお願いしていたことを民間がやっていくような方向性を総合計画の中で打ち出すというのは一つあると良いかもしれません。それが先ほど安孫子委員がおっしゃっていた商工会議所かもしれないというのも一つの案ですね。

○ 安孫子委員

この計画の次にあるアクションプランが見えてくると、イメージができてくるのかもしれない。

○ 河西部会長

では江別の産業の連携と、もう一つ人材とか組織づくりを柱として立てることにします。そうすると柱の数が多くなりすぎますので、今の5つの柱をある程度整理して、全体で5つぐらいの柱とするということはどうでしょうか。たとえば、「○ 北海道フード・コンプレックス国際戦略総合特区の推進」は、もともと1次産業を高付加価値化していくとするものなので、「○ 農業を核とした産業の育成」のあたりと統合してはどうでしょう。

○ 安孫子委員

フード・コンプレックス国際戦略総合特区自体、どういう取っ掛かりでやれるかを考えると、結構大変な仕事です。政権が替わって、整理するという話をしている人もいますので、もしかしたら変わるかもしれません。国際戦略総合特区という言葉が立派過ぎますが、これは地元には縛り付ける話ではなくて、非常に広い問題を捉えていますので、これを上手く肉付けして広いマーケティングに繋げていくということを盛り込むと何か見えてくるかと思います。実際に今取り組んでいる情報大の機能性試験は、話題にはなりますが、経済的な効果として実際にこれを活かして地域で特色のある活動をするとなると、かなりみんなの力を合わせて総合力を発揮しなければなりません。手っ取り早い話をすると、どこかからこれに関係する企業に来てもらった方が良いということになりますので、そのあたりが良く見えてきません。それと「1次産業を基盤にした付加価値の高い産業の集積」とありますが、1次産品の供給力としては、一部はあるにしても江別だけが特別なものを沢山つくっている訳ではないので、それだけで良いのか疑問です。表現は良いのですが、結構大変な話だと思います。

○ 河西部会長

やはりマーケティングなのだと思います。まちむら農場のアイスクリームなどは、完全にブランドになっています。同じ原材料を使いながらもきちんと売り込んでいくところが、付加価値を付けていくということなのだと思います。

○ 安孫子委員

バラバラで動くのではなく、江別の力を集約できる流れができてくると良いが、それはアクションプランの方でできてくれば良いと思いますので、総合計画の段階でそういう看板を掲げる必要はないかとも思います。

○ 町村委員

フード・コンプレックスの所だけとても具体的です。実際に計画の途中で政権が替わったなど何らかの理由でやめるという話になったときに、途中で見直すとしても総合計画の中には残ってしまうではないでしょうか。

○ 河西部会長

フード・コンプレックスは、柱というよりもどちらかという柱の中身ではないでしょうか。たとえば、「○ 農業を核とした産業の育成」を一つの柱として、その中にフード・コンプレックスが入るとい方が違和感が無いかもしれません。

○ 安孫子委員

「フード」と付いているから1次産業と言っているけれども、必ずしも1次産業だけに関係するというものではありません。

○ 河西部会長

加工食品、飲食店、バイオ関係も含まれます。

○ 町村委員

商店街の環境関係、エネルギー関係のことも入ってくるかもしれません。

○ 河西部会長

では柱立てを1本化しましょう。「○ 北海道フード・コンプレックス国際戦略総合特区の推進」は柱の中身の方に入れることにして、柱としては農業を起点とした2次産業・3次産業の展開というような内容で、文言は事務局で考えてください。それから先ほど町村委員からご意見のあった、人材の育成や組織の創出ということについては、中小企業の活性化の中に、人材の話も入っていますので、この辺りに入れるというのはどうでしょうか。それとも柱として打ち出すのが良いでしょうか。

○ 町村委員

中小企業だけのことではない気もします。

○ 河西部会長

先ほど安孫子委員がおっしゃった地域の競争力ということでも人材育成は関係していますね。

○ 町村委員

産業連携の話もあり、すごく良い柱ではないか思いますので、それと人材のことを上手く組み合わせると一つの柱にしてはどうでしょうか。

○ 河西部会長

では、産業連携と人材で一つの柱をつくって、全部で5つの柱としましょう。

○ 安孫子委員

参考の2ページで「内容」のところに「環境配慮型企業」とあり、「市民会議での具体的な取組提言」では「環境保全型企業」とありますが、何か違いがあるのでしょうか。

○ 事務局

保全よりも大きな括りの表現にするために配慮としてあります。

○ 安孫子委員

「・環境負荷の少ない循環型農業の推進」とありますが、農業だけでなく、産業全体で家庭も含めて、省エネ化することが重要だと思います。より積極的に設備投資して環境負荷を少なくするというのは、農業だけに限定されないことだと思います。

○ 河西部会長

ここはもっと幅広く「循環型産業」として、産業全体の表現としましょう。

<柱立てについての議論のまとめ>

○ 河西部会長

それでは今までの議論を整理した内容を事務局から説明してもらえますか。
(事務局説明)

○ 河西部会長

協働に関していうと、江別の地域内での協働と、もう一つは江別という枠組みを超えた広域的な協働ということも出てきました。その中で、協働という場合の主体について、どこが企画立案して、どこが実行していくのか、誰がマネジメントしていくのかといったことを明確にしなければならないということが課題としてあります。それを総合計画の素案の中で書くことが良いのかどうかは別にして、「ともにつくる協働のまちづくり」の戦略の中には新しい組織の設立という表記がありますので、第2部会の柱の中でも一つ書き込むことは可能ではないかと思います。産業の連携の柱の中で、例えば商工会議所が中心となって新しいネットワークをつくってやっていくというようなことを書くことも可能ではないかと思います。

情報発信は、情報発信ということだけで捉えると、シティプロモーションの戦略の方に組み込んでいますが、マーケティングという考え方からすると、この部会の戦略の中に入れても良いのではないかと思います。特に、付加価値化していくためにはマーケティング、顧客を起点にして考えていくという売り方、それを地域全体で考えて実行していくというものがあっても良いのではないのでしょうか。これは、産業連携の中に具体的な中身として書いてはどうかと思います。

産業の連携の中で、市民を巻き込んだ形での新しい連携といったことを柱の中にも含めることも可能かもしれません。

それでは今日の議論を踏まえて事務局と相談して柱立てを整理した後、みなさんにご確認いただいてご意見をいただき、そのあと全体会議に諮りたいと思います。

(2) えべつ未来づくりビジョンの内容について

○ 河西部会長

えべつ未来づくりビジョンの中で、産業に関わる部分についてみなさんのご意見をいただきたいと思います。

○ 徳永委員

農協サイドからいうと「都市型農業」という表現はありません。農業者の立場からすると、自分たちが生活している地域社会とどのように共存していくのか、あるいは地域社会に農業がどう貢献できるのかということです。それを具体的に言うと、先ほど安孫子委員がおっしゃったように環境に負荷をかけない循環型農業というのが一つとしてあるでしょうし、あるいは限られた農地の中でつくるものは何なのかということです。基本的には、「都市型」という表現はありません。消費者の立場から見て「都市型」という表現をどう感じますか。

○ 草野委員

少し分かりづらいと思います。

○ 河西部会長

行政としては「都市型農業」という言葉をどのような意味合いで使っているのか、事務局からご説明をお願いします。

○ 事務局

第5次総合計画では、札幌に隣接しているという意味合いです。「都市近郊型」という言い方もありますが、所管の農業振興課に確認したところ、新しい総合計画でも「都市型農業」という表現にしたいとのことでした。農業振興計画で「都市型農業」という言葉を使っており、それに合わせて総合計画でも「都市型農業」としています。

○ 草野委員

農業者の立場から言うと、「地域密着型農業」という表現の方がより分かり易いのではないのでしょうか。

○ 徳永委員

江別の農村は、地域によっては住宅街に隣接しているところもあれば、どんどん離農が進む中で残された農地を地域の担い手になっている農業者が抱えて十勝に匹敵するぐらいの規模の農地をもって農業を継続している地域もあります。つまり、土地利用型の地域もあれば、都市に隣接した環境で農業をしている人もいます。自分たちの生活圏の中で、色々な環境がある中で自分たちの農業がどう展開できるのかという感覚が現状の我々農業者のイメージです。

○ 河西部会長

それが「都市型」で括られてしまうと、少し意味合いが違うということですね。

○ 安孫子委員

「都市型」については、国の政策の中に何か定義があったようですが、江別の農業にはあまり関係ないようでした。「都市型」という表現はあってもなくても良いのではないのでしょうか。農業の振興とか農業の推進で良いと思います。

○ 河西部会長

委員から「都市型農業」の表現について、違う文言がないか検討するようにご意見があったと所管課にお伝えください。

全体会議の中で「商工業の振興」の部分に、サービス産業やソフト産業を含めた表現にしてはどうかというご意見がありました。それについてはいかがでしょうか。サービス産業で言えば、たとえば福祉関係の事業所が増えていますので、福祉サービスも一つの大きな産業になりつつあります。これまでの総合計画では、商業の中にサービス産業を含めていたかと思えます。

○ 安孫子委員

ネット販売をどこに入れるかという話にもなります。かなりのウエイトを占めるようになっていますが、サービス産業に入るのでしょうか。

○ 河西部会長

その辺りは事務局で検討していただくことにして、所管の経済部にもご確認をお願いします。

○ 安孫子委員

12ページの「今後の土地利用の方向性」の部分で、たとえば市街地の中にある一定の規模の空き地ができた場合、そこで軽工業や軽産業のようなものができる仕掛けが必要ではないかと思えます。新しい産業やサービス業が利用できる仕掛けになっていくと、職住近接で色々なことができるということに繋がると思えます。土地利用の方向性として、コンパクト化とその後の空き地の利用をどうするかという視点です。

○ 事務局

その辺りのことは「地域の特性を活かした戦略的土地利用」という文言で表現しています。

○ 河西部会長

実際にどこかまちづくり政策の中でそのことが書き込まれているのでしょうか。政策分野「都市基盤」の「1 市街地整備の推進」の「(4) 計画的な土地利用の推進」のところでしょうか。

○ 安孫子委員

「市街地整備の推進」は、市街地が膨張していく時にはこういう言い方だと思いますが、そうではない場合は、この表現で良いのでしょうか。

○ 徳永委員

12ページの「土地利用の方向性」に「農村地域が持つ豊かな環境を活かした利用も進めていきます」と表現されているが、このままの内容で受け止めて良いですか。「優良農地の保全と有効利用を図る」という表現はわかりますが、農家宅地は色々利用するにしても規制があります。行政が窓口となって、ある程度市街化調整区域の規制緩和に努めてもらえるということでしょうか。

○ 安孫子委員

観光とも関わってくることだと思います。

○ 事務局

江別の市域は全て都市計画区域という網がかかっています。その中で、市街地については市街化区域ということで、市街化を促進していく区域という位置づけになっており、それ以外の、主に農業地域になります。こちらについては調整区域として、市街化を促進しない区域ということで、2つに区分されています。市街化調整区域については厳しく市街化が抑制されていますので、簡単に土地利用上の用途の変更ができない状況の中で、最近では新たな農業振興策としてグリーンツーリズムなどの新しい使い方を想定した施策が色々と進められていますので、その辺りの趣旨を「農村地域が持つ豊かな環境を活かした利用も進めていきます」という文言で表現しています。

○ 徳永委員

規制については、隣の市町村と比較すると、当別町や新篠津村ではできるのに江別ではできないということがあります。

○ 町村委員

直売所を去年オープンしましたが、まずグリーンツーリズムの関係の指定を地域として受けるところから始まり、それが認められた時点で初めて建物の建築ができます。建築する段階で今度は都市計画法上の規制をクリアする必要があるというように、直売所を開設するだけで、二重・三重の規制があり、二年も三年もかかりました。

○ 徳永委員

そういった規制がある中で「農村地域が持つ豊かな環境を活かした利用も進めていきます」と表現しているからには、行政としてそれなりの覚悟があつての記載なのかどうか確認させていただきたいと思います。

○ 事務局

もう少し分かりやすく、たとえばグリーンツーリズムなどといった形で、農村環境を活かした新たな土地利用を進めていくというような表現に改めます。

○ 安孫子委員

町村委員のご意見を伺いたいのですが、13ページで「観光による産業の振興」とありますが、「観光による産業の振興」と「産業による観光の振興」のどちらが適切でしょうか。目指しているところは観光産業ということなのでしょう。

○ 町村委員

観光産業という意味合いではないようです。14ページで「観光による産業の振興」の内容が具体的に書いてあるのを見ると、観光を契機としてそれに関連する農業や商業、情報産業を活性化させていこうという意味だと思います。

○ 河西部会長

観光産業そのものも振興しようという話はえべつ未来市民会議の中では出ていました。

○ 安孫子委員

観光産業というジャンルはないという話を聞きました。旅行業などはありますが、観光産業として集約された定義はないようです。

○ 河西部会長

異論がないようですので、「観光による産業の振興」という表現のままで良いということにします。

○ 安孫子委員

I Tに関係したことやソフト関連産業のことについて「商工業の振興」のところに表現しなくて良いのでしょうか。

○ 事務局

行政計画ですので、行政として支援する対象を中心に施策を考えており、一般的なソフト産業やI T関係の部分などについては記載していません。

○ 河西部会長

総合計画に載せると、きちんと施策や事業に落とし込んで予算立てをしなければならなくなり、効果も求められます。

○ 安孫子委員

江別経済ネットワークなどは、テーマを絞らないで色々なことができます。そういった活動として「(2)産学官連携による新たな技術開発」の中で、ソフト産業と繋がった開発などをやるということであれば、すでに繋がっているのではないのでしょうか。そういう世の中になっているということが、見えた方が良いと思います。現実にもうまくいけば、どんどん商売に繋がっていきます。

○ 河西部会長

徳永委員にお聞きしますが、「都市型農業の推進」の中の4つの項目については、これでよろしいでしょうか。

○ 徳永委員

付け加えようと思えばたくさんありますが、やはりこのような方向性をどうやって具現化してくかが重要だと思います。それと、自分たちの産業だけではなく、他の産業がどのような考え方で取り組んでいるかということについて、お互いに情報を共有することが必要だと思います。

○ 河西部会長

それについてはまちづくり政策ではなく、えべつ未来戦略で産業の連携というような内容で一つの柱としましょう。

それでは他にご意見無いようですので、「3 めざすまちの姿」の「土地利用の方向性」については少しご意見が出ましたが、「4 まちづくりの基本方向」に関しては特に大きな問題はないということで、部会としての意見をまとめたいと思います。

(3) その他

次回の第4回行政審議会（全体会議）の日程調整のため、各委員の都合確認

■閉会